

2020年11月22日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「あなたのパンを水の上に投げよ」

聖書：コヘレトの言葉11:1～5

教会は、長年この地で御言葉を語り続けている。それはパンを水の上に投げているかのように無駄に見えることの繰り返しだが、しかし聖書は、「月日がたってから、それを見いだす」と、希望の言葉、慰めの言葉を記す。この「あなたのパンを水の上に投げよ」とは、決して有り余るパンを投げたのでは勿論ない。そこには苦労があり、痛みが伴うのである。ゆえに聖書の言葉が希望として、慰めとして帰ってくる。

もう一つ。この「あなたのパンを水の上に投げよ」とは、キリストの平和を発信することにも通ずるはずだ。2012年10月から毎週、普天間基地のゲート前でゴスペルを歌っているが、私たち住民、うちなーんちゅ(沖縄人)の命を軽視する状況に対して、讃美歌を歌うことでキリストの平和の働きを続けている。あるご年配牧師が、「これは現代の路傍伝道だね」とおっしゃったことを思い出す。

時にいろんな方が訪ねて来られるが、ある時、戦前から普天間に住んでおられるという方が親子三人で私たちが歌っているゲート前に来られた。90代手前のおばあさんと娘さん、そしてお孫さんで来られ、クリスチャンでもないが、しばらく一緒に讃美歌を歌った。そのおばあさんが挨拶されて、「いつも普天間のために平和活動されてありがとうございます。戦前、私の家はこの普天間基地の中にあつて、畑もお墓もここにあつて、全部取られてしまった」とおっしゃられて、「昔は、じのーんなんまち(琉球松の並木道)があつて、でーじちびら一さたんど(とてもすばらしかったよ)」と、「早く、返して欲しい。皆さんありがとう！」と親子三世代で、わざわざお礼を言いに来られた。

こういうキリストの福音を発信する業があることを、改めて教えられたことである。この働きは、「パンを水の上に投げ」るようなものであろう。こんな無駄なことをして・・・という声も聞こえてくる。しかし、決して無意味なことではないと思っている。「月日がたってから、それを見いだすだろう」という言葉に、希望を見ていきたいし、その福音の恵みに共に預かって欲しいと願う。

讃美歌 536 番はコヘレトの言葉を歌っている。「報いを望まで／人に与えよ」この讃美歌は、伝道者への慰め、励ましに満ちている。(神谷)